
死なずの勇者と運命の世界と

神薙和刃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死なずの勇者と運命の世界と

【Nコード】

N1532E

【作者名】

神薙和刃

【あらすじ】

不老不死の勇者アルフレッドと、運命を見定める存在と、幾世代の中で移り変わる仲間たちとの長い長い年代史。

第一章 死なずの勇者と三人の子供

勇者アルフレッドは知恵有る邪竜ディアブロの首に剣を突き立てた。首から吹き出る鮮血と喉からしゃくりあげた絶叫と共に地に伏せる邪竜ディアブロ。

赤い月を背景におどろおどろしく建立されていた漆黒の城塞は既に炎に包まれおり、命の灯火が消えかかっている主の邪竜ディアブロと運命を共にしようとしていた。

”口惜しや。万物の頂点に立つ私が、よもや人間に敗れ去るとは”

邪竜ディアブロの辞世の言葉を聞き取りながら、勇者アルフレッドは得物を邪竜ディアブロの首から引き抜いた。

血を浴び紅く輝くそれを振るい、血を払いアルフレッドは邪竜ディアブロの側へひざまづく。

「お前は沢山殺しすぎた。赦される許容量を越えすぎていたんだよ」

ふ、と短く笑い目を細める邪竜ディアブロ。

目の前の勇者アルフレッドを映す視界がぼやけ始めたそのとき、
既^デ成景^{ジャウ}は起こりはじめた。

”まるで千年前、父が死した時と同じだ。

…父もまた世界を統べようとし、人間に打ち倒された。

幼い我は人間に情けをかけられ、惨めに生き延びた…が、まさか父の二の轍を踏む羽目になるとは”

「『奢れるものはただ等しく灰になり、慎ましき者にこそ栄光は有りけり』…だったか」

邪竜ディアブロは勇者アルフレッドの放った言葉にハッと目を見開いた。

地なりのような唸り声をあげ、残された力を使い爪を向ける。

”おお…まさしく千年前に父が遺した言葉。

…そうか！見た顔と思えばお前は……！”

邪竜ディアブロの言葉は勇者アルフレッドが横に払った剣の一撃により遮られた。

斬り裂かれた肉の間から吹き出る鮮血が勇者アルフレッドの体を赤に染めてゆく。

物言わぬ屍と化したであろう邪竜ディアブロを視界に収め、勇者アルフレッドもまた地面に倒れ込む。

剣を地に

さながら墓標のように突き立てながら。

「お前も、お前の父の様に俺を残して逝くのか」

呟く勇者アルフレッド。

邪竜ディアブロから流れる血が。

城塞を燃やす炎が。

勇者アルフレッドの視界に映る世界全てを赤に染め上げる。

勇者アルフレッドの世界はぼやけ、黒い闇へと沈んでいった。

ヴァレンシア暦

1999年 7月

【邪竜ディアブロ討伐】

ヴァレンシア暦

2099年 7月

勇者アルフレッドが邪竜ディアブロ討伐に成功して百年経過した今日
ここラグナスの街ではそれを記念し感謝祭が催されている。

祭りを彩る露店や催し物の準備に勤しむ住人や、遠方をはるばる街
に來た観光客とでこった返す大通りを、三人の子供がスイスイと進
んでゆく。

歳は10程度

二人の男子に一人の女子だ。

三人で、今日はどのお店に行こうかなどと楽しげに話をしながら人
混みを避けて走っていれば、短く刈り込んだ赤い髪の毛の少年が男
にぶつかる。

「わっ！…ご、ごめんなさい！」

体を九十度に曲げ頭を下げる少年の頭を、男は優しく撫でた。

「気にしないでいいよ。君は大丈夫か？」

「う、うん」

顔をあげる赤髪の少年

そこに居たのは精悍な顔つきの剣士だった。

亜麻色の髪の毛、少年をやつと脱したかのような青年ではあるが、体
付きはマントを羽織っていてもわかるようにかなり逞しい。

背中には古ぼけた、シンプルな長剣がある。

「とりあえず、ここは人の邪魔になるから別の所にいこうか」

子供たちは頷く。

三人の子供と剣士の周りには人だかりが出来、とてもではないが落ち着いて話が出来る場所では無くなっていた。

「へえ、剣士さんの名前もアルフレッドなんだ！」

「勇者さまとおんなじ！」

街から離れた空き家。

そこは鍵が壊れており、三人の子供たちの秘密基地と化している。

アルフレッドは地べたに、子供たちはボロボロのソファーに腰掛けながら話をしている。

「名前負け…つまり名前が似合わないって色んな人からいわれるんだけどな。…そういえば、君たちの名前は？」

赤髪の少年は

「僕、ウィリアム！」

メガネをかけた少年は

「オレはクライブ」

アルフレッドと同じ、亜麻色の髪の少女は

「私ミシエラ」

と、それぞれ元気良く挨拶する。

「ウィリアムにクライブ、それにミシエラか。いい名前だな」

「あ、僕いつもウィルって呼ばれるからアルフレッドさんもウィルって呼んで！」

ウィルにそう言われアルフレッドは微笑み

「俺もアルでいいよ」と三人に申し出た。

「アルは何で旅をしているの？」

「やっぱり剣士らしく修行とか！」

「私的にはロマンチックに故郷に残した恋人に会いに行くとかがいいな」

やいのやいのと質問攻めをする子供たちに苦笑するアルフレッド。
ふう、と息を一つつき座り直す。

「まあ、色々…かな。」

約束していたってのもあるし、自分がそうしたいってのもある」

「約束？」

「約束」

訳が分からず三人揃って首を傾げる子供に思わず噴き出すアルフレッド。

子供たちも何故アルフレッドが噴き出したのか分からないが、つられて笑い出す。

その後アルフレッド達は日が傾くまで話し込み、話につき合い宿を探し損ねたアルフレッドはウィルの家に泊めて貰えると言ったことになった。

夕飯をご馳走になったアルフレッドはウィルの部屋で寝ることになった。

床に毛布代わりのマントを敷き、枕元に剣を置き横たわるアルフレッド。

ベッドの上からウィルがひょいっと顔を出す。

「ねえアル、アルはこのお祭りがなんだったか分かる？」

一応、とアルは曖昧に頷く。

ウィルはそれを見るとにいつと笑ってみせる。

「僕さ、勇者アルフレッドみたいになりたいんだ！弱きを助け悪しきをくじく正義の味方に」

ウィルの屈託の無い笑みを見、押し黙ったアルフレッド。
ウィルはアルフレッドの浮かべた表情にぎよっとする。

泣きそう、だったのだ。

何かをこらえるかのように瞳を潤ませるアルフレッドにウィルは慌てる。

「ど、どうしたのアル？」

「いや、何でもない。何でもないよウィル」

取り繕うかのような笑みを浮かべるアルフレッド。

幼さ故か、その笑みを『心から』の笑みと勘違いしたウィルは

「そっか」と安心したように呟く。

やがて眠たそうに目をこするウィルに

「もう寝な」と促し、共に眠りに落ちるアルフレッド。

瞳の裏に何かの情景を映しながら、アルフレッドの意識は闇に沈んだ。

来る。

あの暗く恐ろしい空の向こうから。

あの先が見えぬ曇天を切り裂いた彼方から。

懐かしいものが
恐ろしいものが

やって来る
！

突如感じ取った気配に目を覚ましたアルフレッドは枕元の剣を手に取り上げる。

ウィルは当然ながら気配に気づかず安眠している。

しばらくその穏やかな寝顔を眺め、気配の主を突き止めようと表へ出るアルフレッド。

「……！」

アルフレッドが見たものは、暗い空。隙間なく空を覆い尽くす魔物の軍勢。

突如空に出来た群の一部が下に隆起し、塊となって落下してくる。

魔物が降り注いだ時に生じた轟音により街は眠りから醒める。

「なんだこの音は……！」

「あれを見る！」

「ま、魔物だああっ！」

街は上へ下への騒乱。

更には街の勝手分からぬ観光客も居るため昼間以上に大通りは混雑し、人々は魔物の恰好の獲物となる。

「させん！」

大も小も関係なく魔物を一太刀で葬り去りながら街の人々を助けてゆくアルフレッド。

勇猛果敢なアルフレッドの活躍に街の人間は魅了されている。

そんな最中。

「いた！クライブ！」

「見つかったのか！」

両親と離れ、騒乱の最中を走るウィルとクライブ。

途中で目的

はぐれたミシエラを見つけ出す。

ミシエラは泣いていた。

傍らで事切れた両親を揺さぶりながら。

「おとうさんっ！おかあさん！」

いくら揺さぶってもミシエラの両親は目を覚まさない。

ウィルもクライブも幼いながらに『死』を理解していたから、その結果は分かりきっていた。

しかしミシエラは揺さぶり続ける。

『死』が理解出来ないわけではなく、信じられないから。

「っ」

「クライブ？」

クライブはミシエラを連れて行こうとする。

このままでは魔物の餌になる危険性が高いと理解していたからだ。

しかし一寸遅かった。

ずんぐりした体躯の魔物が三人を見つけてしまったのだ。

「ひっ……！」

「やああだああっ！」

怯えるクライブとミシエラ

その二人の前にウィルが立つ。

両手を広げ、魔物から二人を守るように。

「僕のもとだちに手を出すな！」

凜と言い放つウィル。

膝は震えているが、言葉に淀みはない。

魔物はただ無表情のまま、ウィルに向かい手を振り下ろす。

「はあっ…はあっ」

息を切らしながら街中を走るアルフレッド。

避難し終えたウィルの両親から、ウィルが居ないと言われたのだ。

魔物に襲われて命を落とした住民の亡骸が目につく。

救えなかったという悔恨の感情が胸の内にわくと同時に、ウィルの

死という縁起でもない結末が脳裏に浮かぶ。

（死んでくれるなよ…ウィル！）

アルフレッドが曲がり角を曲がると、今まさにずんぐりした魔物がウィルに右手を振り下ろさんとしている。

（間に合わないっ！）

アルフレッドが目を閉じた瞬間。

” 無様ね。 アルフレッド ”

女の声が響き、魔物が爆散する。

一瞬の出来事に呆然とするウィル。
しかしすぐに緊張の糸が切れ、その場に座り込み泣き出す。

「ウィル！…クライブにミシェラもいたのか」
「…！アルーっ！」

子供たちは涙で汚れた顔のままアルフレッドに抱きつく。
アルフレッドも子供たちを優しく、しかししっかりと抱き締める。

「人気なのね。 勇者アルフレッド」

突如響いた女の声に顔を上げるアルフレッド。
爆散した魔物が居たところには、漆黒の髪を靡かせる女性がいた。

「ヴァレンシア…」

「100年の間に腕が鈍ったのかしら？この程度の魔物の群れ、昔のアナタなら苦労しなかったはずよ」

笑顔で嫌味を話す女性にうつむき加減で

「すまない」と謝るアルフレッド。

アルフレッドの手の中に収まった子供たちは女性を見、さらに女性の放った言葉に驚愕する。

アルが、勇者アルフレッド。

伝説の存在だった勇者アルフレッドが、自身の目の前にいたのだ。

「すごい…すごい！」

「で、デタラメだろ。だって勇者アルフレッドはもう100年前に…」

「アルフレッドは、諸事情により不老不死なのよ」

クライブの一言にヴァレンシアと呼ばれた女性が答える。

「アル…。本当に、アルが」

「…ああ、俺が勇者アルフレッドだ」

ウィルの問いに静かに、しかし確かに頷くアルフレッド。
そしてヴァレンシアへ向き直る。

「ヴァレンシア、何故魔物がいる」

「また『魔王』が現れた。邪竜ディアブロに代わる悪しき存在が」

それだけを伝え、ヴァレンシアは虚空へ消え去る。

『忘れないでねアルフレッド。アナタが『アルフレッド』となった
時から【契約】は持ち越されたのだから』

後に残された子供たちとアルフレッド。

「忘れないさ」と言うアルフレッドの呟きは風に吹かれ、誰の耳に入ることなく消えた。

騒ぎから3日後。

街の復旧を手伝っていたアルフレッドは、この街を今日発つ旨を子供たちに告げた。

子供たちは泣かず、なにか決意を秘めた表情でアルフレッドの前に立つ。

「……どうした？」

「僕たちも連れてって。アル」

アルフレッドはその言葉を聞くなり、無言で立ち去ろうとする。

しかし子供たちはすぐに回り込み、アルフレッドの前に立ちはだかる。

「……何故だ？」

「昨日、決めたんだ」

「アルが、勇者アルフレッドだったなんて…」

「寝耳に水…」

「すごいよね…」

復旧作業に従事する大人達を見つめる子供たち。
その中にはアルフレッドもいた。

三人の頭に浮かぶのは昨日の出来事と、アルフレッドの今までの出来事。

聞けば今まで語り継がれてきた世界の危機を救ってきた勇者とは、
全てアルフレッドのことなのだ。

不老不死のアルフレッドが今まで戦って
今まで救ってきたのだ。

たった独りで。

「じゃあ、アルは誰が助けるの？」

涙を浮かべるミシエラ。

他人に望まれ

救いの手を平等に差し伸べ

自らをすり減らしながら永遠に生きていくアルフレッドを思つと思わずには居られない。

『助けたい』と。

「僕たちが助けよう」

ウィルがクライブとミシエラに語りかける。

「僕たちはアルみたく不老不死じゃない」

だけど

アルフレッドを助けることは出来るはずだ。

「俺も、助ける」

「私も助けるよ！」

風が吹く。

一陣の風に吹かれた三人は、決意の瞳で空の彼方を見据えた。

「両親には話した」

「俺は爺さん婆さんだけだけど、二人には納得いくまで説明した」

「私は…両親いなくなっちゃったから」

帰るべき場所を捨てた二人と、帰るべき場所の無い一人の目をそらずに見つめ返すアルフレッド。

「今は足手まといかもしれないけど、必ずアルフレッドを助けられるようになるから…！」

「お願い！アル！」

「おねがいしますっ！」

頭を下げる三人を尻目にアルフレッドは背を向ける。

「危険だぞ」

「分かってる」

「食うものに困るぞ」

「みんな得手分けすれば大丈夫だよ」

「野宿が多くなるぞ」

「みんながいれば、平気！」

アルフレッドはふっ、と笑いそのまま歩く。

後ろの三人に

「付いて来い」と促しながら。

『…うんっ！』

明るい声が、晴れ渡った空に響く。

勇者アルフレッドと三人の子供たちは、ラグナスの街を発つ。

ウィリアム 10 歳

クライブ 12 歳

ミシェラ 9 歳

ヴァレンシア 歴

2099 年 7 月の事である。

【第一章 完】

第二章 死なずの勇者と三人の仲間と暁の誓い

勇者アルフレッド

それは幾度と無く世界を襲う未曾有の危機から人々を救ってきた者。

初めての活躍は

ヴァレンシア暦

0017年 5の月

【魔王討伐】

である。

そして真新しい活躍は

ヴァレンシア暦

1999年 7の月

【邪竜ディアブロ討伐】

である。

長い間彼が戦ってこられたのは、
彼が【呪い】に蝕まれているからである。

【不老不死の呪い】

勇者アルフレッドはその呪いのお陰で今まで戦ってきたのだ。

そして運命は、

否が応でも彼を次の戦いへ誘う。

新たに出来た三人の仲間と共に。

ヴァレンシア暦

2004年 5の月

【ザイルの街にて】

「着いた！」

「長かったねー」

今年15になったウィリアムと、13になったミシエラは背負った荷物を下ろし、同時に伸びをする。

五年前には短く刈り込んでいたウィリアムの髪は耳にかかるほど伸び、ミシエラの亜麻色の髪も滑らかに、腰まで伸びていた。

その顔つきも子供のそれでは無く、様々な事柄を理解した大人の面も醸し出しつつある。

「ほら二人とも、街の入り口で固まってないで」

「他の旅人の迷惑になんだろうーが。もう少し考えろ」

アルフレッドとクライブが二人に続いて、街の入り口である石造りのアーチを通過する。

クライブは17

メガネは相変わらずだが、身長はアルフレッドと同じにまで伸び、顔つきも大人のものになっている。

そしてアルフレッドと同じく剣を背負っている。

違いを上げれば、両手持ちの幅広の剣ということだろうか。

アルフレッドは5年前

ウィリアム達が動向を申し出たあの時から全く変わっていない。

不老不死の呪い故に。

「とりあえず、宿を確保しようか。ウィル頼む」
「分かった！」

人ごみをスイスイと掻き分け向こうへ消えたウィルをしばらく眺めたあと、クライブとミシエラを買い出しに行かせ、アルフレッドはアーチ脇にある石壁に寄りかかった。

新たな魔王。

既知の女性ヴァレンシアから言われた言葉。

無限に闘い続けなければならない宿命なのかとアルフレッドはため息をつく。

しかし、運命を嘆いたかと言って運命が変わらないと言うのも、幾千年の間に悟っていた。

「覚悟していた筈だったんだけどな」

目を伏せ、自嘲するアルフレッド。

出来れば三人の仲間を巻き込みたくはなかった。

それでも、側に居て欲しかった。

彼等の純粋な願いを尊重したわけではなく、ただただ己の為に。

幾千年も生きれば、

親しかった人間は皆死ぬ。

どれだけ友情を感じても

どれだけ愛し合おうと

結局置いて生く。

結局老いて逝かれる。

それでもあの三人を仲間にしたのは、孤独に耐えきれなかったからだろう。

（まったく馬鹿らしい）

矛盾した想いに耽っていれば、ウィルが手を振り回しこちらに向かってくる。

あの様子からして、宿を見つける事が出来たらしい。

（せめて今は、仲間と居られる幸せを感じさせてくれ）

いつか来る辛い別れの影にそう懇願し、アルフレッドはウィルのもとへ走った。

宿の一室でアルフレッドと三人は今日入手した情報を入手していた。

「今の魔王『混沌の担い手レギオン』は北の大地を拠点にしている
って聞いたぜ」

「北…『漆黒の城塞』だな」

アルフレッドの発した『漆黒の城塞』と言う単語に頷く三人。

勇者アルフレッドの伝説を語る上で欠かせないのが『漆黒の城塞』。
勇者アルフレッドが倒すべき存在は必ず『漆黒の城塞』を拠点とするのだ。

「長い旅になるな」

「どれくらい？」

「半世紀以上はかかる」

『半世紀！？』

同時に声を出して驚く三人。

なぜならどの伝承にもそんな事は書いていないからだ。
アルフレッドに言わせれば

「時間なんて記しても無駄」だと言うことらしい。

「伝承じゃ『多くの仲間が傷付いて死んでいった』なんてあるが、
実際は衰退による別れや老衰による死別が重なっただけなんだ」
「そう…なんだ」

「目の前で死なれるよりはマシ」とアルフレッドは語った。
が、ウィリアムは思う。

避けられない、運命の死が一番辛いのだと。

誰かに殺されたり、自身の過失で死なせたのなら怒りの矛先を誰かに、若しくは自身に向けることが出来る。

だけど自然の摂理なら誰にも怒りは向けられない。
そうして段々とやり場のない虚しさや怒りが鬱積していく。

アルフレッドはどれだけそんな感情を背負ってきたのだろうか。
あとどれほど背負わなければいけないのだろうか。

若いウィリアムには、それしか考える事しか出来なかった。
恐らくはクライブとミシエラも。

「とりあえず、今日はもう寝よう。明日もうちよつと情報を集めて次の街に行く。いいな？」

頷く三人を見たアルフレッドは満足げに頷き、頭から毛布をかぶった。

その瞬間二人の浮かべた悲壮な表情を遮るかのように。

やがて三人もアルフレッドに倣い、毛布をかぶり眠りにつく。
ただ一人、ウィリアムを除いて。

クライブは夜中、自身の大剣を手に部屋を出た。
アルフレッド達を起こさぬよう静かに、そつと。

「なんだ、先を越されてたか」

街の近くの森。

鬱蒼と生い茂る木々に囲まれた、少し開けた場所には木に向かい矢
を射るウィリアムがいた。

木には無数の矢が刺さっており、長い間弓矢の訓練をしていた事を
予想させる。

「寝付けなかったんだ」

「俺も寝付けなかった」

お互い静かに笑い、それぞれの得物を駆使した特訓に励む二人。

それは夜の闇が去り
空が白み始めるまで続いた。

汗だくになりながら地面に倒れ、紫色の空を互いに見上げるウィリアムとクライブ。
もう星も月も見えないが、夜の闇と朝の光が入り混じった空は綺麗だった。

「なあ」

ウィリアムが発した言葉にクライブは首だけを向けた。
既知だからだろうか
ウィリアムが何を言いたいかはすでに理解している。

「終わらせよう。魔王の復活を」
「……」

昼間のアルフレッドの話が鮮明に蘇る。

魔王は必ず復活する。
だから勇者アルフレッドは戦わなければならない。

十年
百年
千年

あるいは、もつと長い時間。

孤独に耐えきれなくなって

仲間を作って

たくさん死に別れて

また孤独になって

「僕たちで終わらせよう。そんな悪循環を」

「もう魔王を出現させないようにして、アルフレッドの不老不死の呪いを解く」

お互いに顔を見合わせ、誓う。

今登り始めた暁の太陽がそのしるしだ。

未だに幼く、青い二人の誓いが今未来にどのような影響を及ぼすのかはまだ解らない。

しかし、不安や恐れの色を纏わないその二つの視線は、不死なる勇者が安らかな安息を得た未来のみを見据えていた。

ウィリアム 15 歳

クライブ 17 歳

今はまだ若い彼らの
暁の誓いである。

「二人とも何処に居たんだ！？心配したんだぞ！」
『ごめんなさい…』

暁の誓いを終えた二人を待っていたのはアルフレッドからの、いきなり無言で外出した事を咎める叱咤だった。

正座させられた二人の頭上からくどくどとアルフレッドの説教が降ってくる。

ミシエラもいきなり居なくなった二人を心配していたらしく、泣きはらした赤い眼で二人を睨んでいた。

説教が不意に止まる。

何事かと思った二人にアルフレッドが抱き付く。

そして、その腕を肩に回し二人を抱き締める。

そして二人の耳元で、かすかに聞こえる声で呟いた。

「頼むから、置いていかないでくれ」

勇者と讃えられている男の、あまりにも弱々しい語気に二人は万感の思いを込め、謝罪した。

幾千年も孤独を味わい続けた男は、この上なく孤独に弱いのだと。

いや、それは間違いだ。

アルフレッドだけに限った事ではない。

どれほど力が強かろうと

どれほど頭が良かろうと

独りで生きられる人間など、この世界にはただ一人として存在しないのだから。

「とりあえず…無事でよかったよ」

「ごめん、アル」

「心配かけたな、アル」

もう良いよ。と手をふるアルフレッドの申し訳なさから押し黙る二人。

その沈黙を打破しようとミシエラがアルフレッドに話し掛ける。

「ねえアル、昨日聞きそびれた…と言うよりずっと聞きそびれた事があるんだけど、質問していい？」

アルフレッドはその質問に心当たりがあるらしく、椅子に腰掛け頷いた。

「あのヴァレンシアって女性、一体何者なの？」

ウィリアムとクライブもその単語にハツとする。

アルフレッドの旅に同行する前、故郷を襲撃した魔物の軍勢。そして魔物に襲われた三人を助けた謎の女性。

アルフレッドと既知であり、更には世界の暦『ヴァレンシア暦』と同じ名前を持つ女性。

アルフレッドは息をつくと、真面目な面もちになった。三人も自然と緊張の糸が張り詰めたような感じになる。

「今まで話す機会も無いし、話さなくてもいいと思ってたが…まあ良いか。話すよ、アイツの事」

俺とアイツ…ヴァレンシアが出会ったのは、最初の魔王を討伐したときだ。

つまりは、

ヴァレンシア暦

0017年

の時だな。

【第二章 完】

第三章 勇者と運命を定める女神

青年の剣士が放った斬撃は、角と羽を持つ巨大な、暗黒の魔物の体をいともたやすく両断する。

青年はその血しぶきにより赤く染められた顔を歪ませ、苦しさと怒りの混じった雄叫びを上げ、次に控えていた対の頭をもつ巨大な狼を斬り伏せた。

よく見れば青年の後ろには幾多もの魔物の死骸が転がっており、今に至るまで壮絶な戦いを繰り広げていたことを容易に想像させる。

亜麻色の髪が血で汚れるのもお構いなしに返り血を浴び続ける青年は、遂に巨大な悪魔と対峙する。

「お前で最後だ。魔王」

『人間にしてはやるのだな。しかし私に勝てるかな』

下がっていなさい。と、そばに控える子供を下がらせる魔王。魔王の子供だろうか。

疲れから震える手を、剣を握り締めることにより何とか持ちこたえさせる。

吠えた青年は剣を携え、
魔王へ突進していった。

無数の切り傷を負い息絶えた魔王の側でしゃがみこむ青年。
青年自身も深手を負い、生死の境をさまよっている。

血塗られた剣に、血塗られた青年の顔が映る。
それは人間離れした、恐ろしい顔になっている。

（人か、化け物か）

青年は自問した。
ただ魔王を討伐するために、幽鬼の如く強さを求め戦ってきた。
その人間離れした強さは賞賛や仲間を集めたが、同時に仲間達を奪
つていった。

既知と呼べる仲間は最早数人しかおらず、大切な人もまた死に
。それでも残るものがあつたからこそ、戦ってきた。

魔王の子供が親の死体と自らをと交互に見定める。

親の仇。と、この子供に命を絶たれるのもまた良いと思っていた。
血塗られた自身にふさわしい末路だと。

しかし、それは無かった。

子供は自身に寄り添い、ありがとう。と呟いた。

その不可解さに眉を潜めれば、不意に眩い光が辺りを包む。

漆黒の城塞が清廉な光りに包まれたと同時に、白い羽根が辺りに舞う。

それはまるで

そう、天使の羽根だ。

白い羽根とは対照的な漆黒の長い髪。

女神と見間違えるほど神々しい美しさをもつ女性が目の前にいた。

『さすがです、剣士アルフレッド』

「…あなたは」

『運命を見定めるため【世界】より遣わされた者』

神託を得たかのように確固たる自信をみなぎらせ、女性は青年へ歩み寄る。

女性は青年の目の前にしゃがみこむと、目の前に丸めた洋紙を差し出した。
金と銀の装飾がほどこされたそれは、女性の輝きを受けさらにきらめいている。

『魔王という、人に災いをなす存在は必ず復活します』

「…また、こんなものが現れると？」

女性はただ静かに頷く。

そして青年へと差し出された洋紙は静かに広がり、その姿を現す。

その洋紙に一行だけ、文字が記されていた。

【不老不死の契約】と

「これは…」

『悪しきものが必ず輪廻し復活するにも関わらず、それを打ち倒す善なるものが必ず復活する保証はありません。だからこそあなたに契約を結んで欲しいのです』

話が見えずに押し黙る青年。

女性は青年の唇に指を当てる。

『確信無き輪廻により善なるものを待つのでは遅すぎる。だから優れた力量と、それを正しきことに使う心を持つあなたを不老不死にし、永遠に戦わせるほうが効率的なのです』

宣告が静かに響く。

世界を救い続けるために、人としての本分を棄てる。と言われたのだ。

「俺は……」

『選択の余地は有りませんよ、剣士アルフレッド。時と命の理^{ことわり}を外れ、悪しきものを討ち滅ぼすのがあなたの役割なのです』

世界の具現化とも言える女性。

その女性から突きつけられた選択。

確かに、自身が永遠に死なない存在として悪と戦い続けるのが『正しいのかもしれない』

そして、青年は遠慮がちに口を開く。

「俺は……」

「……とまあ、これがヴァレンシアと俺との出逢いだよ」
「……」

宿屋の一室内。

アルフレッドと、アルフレッドが不老不死になった経緯を知り、黙
りこむ三人がいる。

「……なんで」
「え？」
「なんでアルは契約を結んだんだ？」

ウィリアムが問う。

三人はもう子供と言うには年をとっている。

不老不死というものが『何を意味しているのか』ぐらいは理解して
いる。

五年前、アルフレッドについていくと決めたときよりも。

人を愛しても、先立たれる。

子を成しても、子供に看取られることはなく子供を看取ってしまう。

なぜ、そんな耐え難い道を選んだのか。

ウィリアムや、クライブやミシエラにはまだ理解できなかった。

「約束、なんだよ」

アルフレッドは曖昧にそう言えば、

「外の空気を吸ってくる」と逃げるように部屋を後にした。

町外れの森

鬱蒼とした木々により薄暗いそこを歩くアルフレッド。

ふと足元を見つめれば、切り株に刻まれた年輪が目立つ。

年を重ねた証として誇らしく残っている跡に触れるアルフレッド。

よく見たら切り株からは僅かに双葉が生えており、さながら切り株がその双葉を生み、育んでいるようにも見える。

「そつだ、これはあんだとの約束なんだ」

二の腕を自らの手のひらでつかみ、抱きしめるようにその場でくまなくアルフレッド。

それは孤独と罪悪に苛まれた、痛みに耐える表情だ。

『不老不死にはならない。と？』

『ああ』

燃え盛る城塞で、女性と青年はそう言葉を交わしていた。

青年の傍らに寄り添う魔王の遺児は、その様を無表情で見つめている。

『あなたは私の言うことを理解していないのですか？』

『理解したから決めたんだよ』

青年は傍らの遺児を左腕で抱き締める。

抱き寄せられた遺児はキョトンとした表情を浮かべながら腕に収まっている。

青年はそんな遺児に笑いかけ、女性へと向き直る。

『確かにあんたの言うことは正しいよ。それが確実だ。…だが』
『だが？』

『だが、人の本分を失ってまで戦うことはしない。：確かに才能はその人限りだ。だけど力や志は、受け継がせることが出来る』

青年はそう言い、遺児を抱く腕に力を込める。

『この子もまた俺を受け継ぐ可能性がある。俺は人として老いて死にたい。そうして死ぬまでの間に俺の力を受け継いだ人間が、更に別の人間に力を伝えていく。：それが段々と重なれば、俺以上の力になるんだ』

『力を正しく受け継がないのかもしれないですよ』

それは無いと言いたげに微笑む青年。

そして、迷いの無い瞳で女性に告げる。

『人は、過ちを正せるから』

例え誤った道に往こうとも、必ず戻ってくる
戻ってこれると信じている。

すべてを語らずとも真意を悟ったのか、女性は洋紙をしまい、姿を消す。

城塞に満ちた白い光は消え、今や燃え盛る炎の赤い光が周囲を照らしている。

『忘れないで下さい。あなたは世界にとって大切な存在。あなたが正しく力を伝達出来なければ世界が終わることを』

遺児を抱きかかえ、中空から降る女性の声に

「忘れないさ」と青年は言う。

『…行こうか』

『…』

魔王の遺児はただ青年に黙って頷き、青年はそれに笑いかけると城塞を脱出するべく駆け足でその場を立ち去った。

ヴァレンシア暦

0017年 11の月

【魔王討伐】

魔王を討伐したのは当時17才の青年。

魔王を討伐しようと立ち上がり、旅の途中、夢半ばにして倒れた魔術師の父と剣士の母との間に生まれた青年。

名をアルフレッドと言う。

【第三章 完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1532e/>

死なずの勇者と運命の世界と

2010年10月10日08時09分発行